

何処へ

—— 映画文学人生論

正宗白鳥 (1879-1962)

『何処へ』(1908) 「早稲田文学」

『塵埃』(1907) 「趣味」

『微光』(1910) 「中央公論」

『自然主義盛衰史』(1948) 「風雪」

主義に酔えず読書に酔えず、酒に酔えず、
女に酔えず、己の才智にも酔えぬ身

正宗白鳥の『何処へ』の主人公菅沼健次は日露戦争直後のアプレゲール、二十一世紀の日本の何処かでも見かけることができそうなニヒルで、醒めた青年である。彼は主義に酔えず、読書に酔えず。酒に酔えず、女に酔えず、己の才智にも酔えぬ身を、独りで哀れに感じている。

酔えないという生理は、聡明な批判精神にも通じる。彼は桂田博士に学才を認められ、大学の文科を卒業したが、自分の素質からいって学者で安んじていられそうじゃないと思う。多量の書物を読んで一生を終わる、下らないじゃないか。

卒業後は博士の推選で中学教師になったが、これは三月ばかりで退職、今日まで一年ばかり雑誌記者を勤めている。まあ社のほうが暇つぶしで、遊ぶほうが本職のようなものだ。しかし本職となると、遊ぶ方法に苦心する。如何にして遊ぶべきかが、僕の当面の課題であるといつて怠けている不良社員だ。

「君は不断に煙草を吸ってる。毒だよ」と忠告する友人に対して、僕はこれ程煙草を吸っても、真に味(うま)いと思ったことは一度もないよ。酒だってそうだ。ビフテキだってそうだ。・・・僕は阿片を吸って見たくてならん」などという。ニヒリスト(虚無的な人)だが、破滅型ではない。口は悪いが、根は親切的な男だ、



何処へ

映画文学人生論

そんな彼を立派に育てあげたのが大事業だと父は云う、魂は子供の頭に伝わっている。健次は男らしい大きな考えを持つてゐるから何時かはえらい学者か政治家になる、今に何か為出(しだ)すに違いない。桂田博士にも期待されているし、お金のことなら、どうにでもするから、洋行して勉強してはどうかと博士夫人はすすめてくれる。

彼は父や桂田博士夫妻だけでなく、母や妹や友人の箕浦や織田や織田の妹にも桜木のお雪にも愛せられてこそいれ、さして嫌われてはいない。

たいへん恵まれた、幸せな男だと思うが、彼は愛せられれば愛せられる程、自分には寂しくて力が抜けて孤独の感に堪えぬという。むしろ、「迫害される者は幸いなり」とさえいう。

結局、人間は自分一人だ。自分と他人との間には超えることの出来ない深い溝渠(みぞ)が横たわっている。そのような冷たい認識の持主だが、街頭で見かけた救世軍には共感を示した。

作者の正宗白鳥は批評家として激しい論説を發表し続け、永遠の不平家といわたが、政府から弾圧されるような反社会的な行動にはしっていないし、阿片も吸わなかった。臨終に際してキリスト教への信仰を告白して意外な感を世間に与えたのは、『何処へ』の健次が示した救世軍への共感とつながっているのかもしれない。

金魚売りの声昔は涼しかりし 正宗白鳥